

もったいない！未来のために
母の視点でよりもで見直し
次世代に借金、リスクを残さない

県議会議員 西村久子 県政報告

第4号

発行 西村久子
彦根市甲崎町
TEL・FAX 43-4700
Eメール hisako@country-farm.net



今日よりも明日

寒波襲来、今冬一番の冷え込みの中で新しい年が明けました。一面白銀のキャンパスに、どうぞ本年が穏やかな笑顔の描けることを願っています。

昨年彦根市は、国宝彦根城築城400年祭で沸きに湧いた一年がありました。一般的に低調な市民パワーと揶揄されてきたこれまでに比して、大きな自信につながったことだと思います。しかし、都市の本質上、「やっぱり中心部だけね・・・」といわれる声も否めません。今後どのようにしてその効果を周辺部まで波及していくか、市域が一体となって盛り上げるには、どうしていけばいいのか、新しく迎える「井伊直弼と開国150年祭－日米修好通商条約締結150周年記念事業」に向けて、培った自信と行動力を新たな事業へと明るい展望に期待したいものです。いろいろな地域でさまざまな知恵を活かした市民パワーの集結こそ、大きな効果を生むことは実証済みです。

年初めのある集いで、「我も人もの仕合わせ」という言葉を聞きました。そんな気持ちで一人ひとりが暮らすなら、きっとすばらしい社会が実現することと思います。どうぞ本年が心安らぐ年となることお祈り申し上げます。



昨年12月16日(日)諸先生をお迎えして、第一回県政報告会を開催させていただきました。皆様のご支援を頂き、力を合わせ地域の課題解決に向か、努力してまいります。

どうぞご意見をお寄せください。



12月定例会より抜粋

**滋賀県副知事に
田口 宇一郎氏(彦根市本庄町)
決まる**

極めて厳しい財政状況の中で、喫緊の課題である行政改革の着実な推進とともに、新幹線新駅問題に係る今後の対応や造林公社問題、産業廃棄物処理施設の問題など、山積する県政重要課題に適切、かつ、機動的に対応するため、副知事を2人体制とし、長年県行政にかかわり経験豊富な『田口宇一郎』氏を選任することに同意しました。

平成20年度400億円の財源不足の折から、新たな出費のそりもありますが、組織再編をも視野に入れ、「待った！」のない行財政改革をしていかねばならぬ事態となっています。嘉田知事の掲げるもったいない県政の補佐役として、果敢に取り組まれその活躍を期待するものです。

一般質問(12月定例会)琵琶湖の抱える問題解決に向けて(抜粋)

湖底の低酸素化について・・・琵琶湖環境部長にお尋ねします。

天皇・皇后両陛下のご臨席のもと、「第27回全国豊かな海づくり大会～びわ湖大会～」は、成功裏に終了しました。大会当日、湖上での漁船による見事なパレード、琵琶湖にもこれほどのすばらしい営みが続いていた・・・と涙の出るほどの感動でした。ともに成功を喜び、関係各位の多大のご労苦に、心から敬意を表するものでございます。

大会テーマは、「この海を 守る約束未来のために」、また、「山から海まで、環境保全に取組み、豊かな海を育てます。」を基本理念として、水質の問題や生態系の変化など、危機的状況にあるびわ湖の現状を理解し、どのようにして、もとの豊かで美しいびわ湖の姿を取り戻していくか、関係する多くの人々に問題を提起し、行動を求められたように受け取りました。

湖直轄の滋賀県民こそ、悲鳴を上げる琵琶湖の状況をよく知り、情報を共有した上、互いに知恵を出し合って、一人ひとりの実践によって誇れる琵琶湖を取り戻さねば・・と考えます。

それでは、まず、今日深刻化が報道されています、湖底の低酸素化についてお尋ねします。

発生のメカニズムや弊害について、まだ定かでないとしながらも、暖冬により上下の循環が遅れたことによるものと考えておられるようであ

ります。10月22日が定期観測の日のようにありますが、冷たく冷えた水が低層に降りる循環の起こるのは、上層部の水温が、低層の水温より低いことがひとつの要件に思えます。

市販されている海洋深層水のメカニズム説明に北極海の氷に冷やされた水が、滝のように深海にもぐり、2千年の時を経て浮かび上がった水と説明されていました。浮かび上がるのには非常に長い時間を要することになります。また、過去石鹼運動の際、琵琶湖に入った一敵の水は、20年たたないと瀬田川から出て行かない・・・といった話も聞いてありました。すごくゆっくりとした動きです。ということは、些細な汚れもいつたん流し込んでしまったら、非常に長い年月を掛けないと入れ替わることは出来ず、次々と汚れを増加させてしまうこととなります。昭和3~40年ころまでは、川の水を汚したら、罰が当たる（川におしついたら、オチンチンはれるよ!!）・・・と言い伝えられてきたことは、本当であったと思い知ることが出来ます。みんながそれを守る必要性、対策を練る上で一番大切な啓発すべきことでないでしょうか。

素人推理で話してしまいましたが低酸素化、どんな原因が考えられるでしょうか。

原因がわかれば対応策は挙げられると思います。どのような改善策が考えられていますか。

[裏面へ続く](#)

外来魚駆除について・・・農政水産部長にお尋ねします。

県では、有害外来魚ゼロ作戦事業として、外来魚の捕獲事業を実施されていますが、この事業の効果を生息量と捕獲量、その他びわこ在来種の今日的状況から見てどのように変化しているかお示しください。

湖畔に住みながら、常食であったフナやガシロ、モロコ、イサザ、エビ等々なかなかあ目にかかれないのであります。全国豊かな海づくり大会での天皇陛下より、今日の外来魚の実態に心痛めていただくお言葉がありました。多くの人々が関心をもち趣旨を理解して、外来魚撲滅に向けて努力しなければ・・・と思います。

有害外来魚駆除の技術開発についてお尋ねします。

大きな琵琶湖という器から、外来魚をつかんで取り出す・・・気の遠くなる話ですが、どんなに数が減っても、絶やすことは出来ないでしょ。捕獲し続ける必要を感じます。でも、田畠の作物でフェロモンで、ある種のメスだけ捕獲するように、科学的な応用が出来ないでしょ。遺伝子組み換えもこんな方面で活用できたら・・・と思います。孵化しない卵、集めて捕獲する等新たな技術について、所見をお聞かせください。

外来魚リリース禁止の取組について琵琶湖環境部長にお尋ねします。

琵琶湖には多くの釣り客が訪れます。この方たちの釣り上げた外来魚はどうなっているのでしょうか。実態をお知らせください。以前釣り爱好者の大会に参加したことがあります、そのまま水に返す人が半分ぐらいあられました。リリース禁止の条例も出来ましたが、状況はあまり変わっていないようあります。しっかりと釣り人に理解いただき、協力願うにはどうすればいいか、その一つ琵琶湖への進入口であるバスト保管施設等の対応について質問いたします。

2サイクルエンジン猶予期間延長と、それに伴い陸域にある保管施設や水上バイク、バスト保管施設と協定を結んでいるが、利用者の管理の面で“不適切”保管施設との協定を結んでいるのではないか？

協定に基づいて、保管施設利用者（＝猶予者）の350mまで徐行の航行規制やリリース禁止など条例遵守は、どのように担保されているのでしょうか？ 当然、保管施設は、利用者に対してリリース禁止を遵守される責務を負うと考えるが、保管施設は利用者が釣った外来魚の回収を行っているのか。また、回収施設をもっておられるか、お尋ねをします。

(答) 琵琶湖環境部長 今年、湖心部の低層の酸素濃度が低い値を示した原因は、直接には、暖冬により上下が循環する時期が遅れ、循環する期間も短かったことによるものと考えてあります。しかし、全循環が起こるメカニズムは、まだ不明な点が多いことから、実態を把握するため調査地点と調査回数を増やして詳細な調査を行っているところです。これらの結果を解析するとともに、海外の湖沼の事例の研究など知見を収集し、メカニズム解明に取り組むこととしており、琵琶湖環境科学センターの課題の主要なものと位置づけてあります。その結果については、県民の皆さんに逐次わかりやすくお伝えしていきたいと考えてあります。

さて、12月3日から6日にかけて琵琶湖環境科学センターが実施した北湖の水深約90m付近の海底の調査において、撮影した1,900枚の画像のうち、イサザと思われる魚が58体写っており、このうち42個体が異常と見られ、また、エビ類にも同様の異常が見られたため、12月7日にこの調査によって得られた情報を、県として公表したところでございます。

なお、「湖底で魚の大量死」や「低酸素化の影響」などの報道も見受けられますが、魚の死亡数につきましては、取材を受けた研究員が、その原因を低酸素化によるものと仮定した上で、その影響が及んでいる範囲を想定して推計したもので。

公表の際には漁業者にも問い合わせてありますが、異常情報は寄せられないことを確認しており、県として、今回の現象がどの程度に及んでいるのか、また、低酸素化との関係がどうなのかなど、現時点では明らかな判断をいたしておりません。このため、琵琶湖環境科学センターでは、原因の把握に向けて、取得した全てのデーターの解析を行うとともに、昨日には調査船に装備している撮影カメラと採取器によって、湖底の影響および魚の採取を行ったところであり、1月にはそれらの底引き網による底生生物の採取など、追加調査を実施する予定であり、それらの結果を踏まえて見解を早急にまとめ、公表をしたいと考えてあります。

次に、低酸素化の対応策についてですが、これまで申し上げていますとおり、琵琶湖の深層に酸素を供給する全循環のメカニズムにはまだ不明な点が多いことから、現時点で対応策を示すことはできませんが、深層での酸素の消費は、表層で増殖したプランクトンが深層に沈降して分解することによって生ずることから、基本的な対策としては、

県民あげての富栄養化防止の一層の推進にあると考えてあり、温暖化対策と併せて、これまで進めてきた負荷削減の取り組みを一層進めてまいりたいと考えてあります。

(答) 農政水産部長 大口バスやブルーギルといった外来魚は、その食害によって琵琶湖の水産資源を大きく減少させるとともに、生態系に大きな歪みを生じさせる原因となってあります。

このため、平成14年から外来魚の駆除事業を強化し、翌年度からは「有害外来魚ゼロ作戦事業」として、一層積極的な事業展開に努めてきましたのであり、平成14年度から18年度までの間に、毎年408トンから521トンの外来魚を駆除してまいりました。さらに、オオクチバスの稚魚を、タモ網すくいで毎年317万尾から1,430万尾駆除しており、これは親魚となる4歳魚に換算いたしますと47トンから211トンに相当いたします。

こうした駆除事業の結果、平成14年春に約3,000トンと推定してありました外来魚の生息量は、駆除量と捕獲量の体調組成から資源学的に解析しましたところ、今年の春には約1,600トンまで減少してあると推定しております。

また、在来種の状況であります、たとえばスジエビの漁獲量は、ブルーギルの影響が顕著になってきた平成5年以前は、600トン以上ありました、駆除事業を強化する前年の平成13年には、167トンと大きく減少いたしました。しかし、近年では増加に転じ、平成17年統計では285トンとなってあります。

スジエビは、生後1年という短い期間で繁殖できるため、外来魚の減少に伴い、いち早く資源が回復に転じてきたものと考えられ、また最近、漁業者の方々からも、ニゴロブナやホンモロコ、イサザも獲れだしたとうれしい話を伺い、今後も在来種の漁獲量は、順次回復していくものと期待しております。

次に新たな外来魚駆除技術についてであります、オオクチバスの生態の特徴である、大型の雄ほど縄張りを持ちやすく、卵や孵化した仔魚を一定期間保護するという性質を利用して、大型の雄に避妊手術を施することで、他の雄の繁殖への参加を抑制し、産んだ卵を無効に出来るなどを、水産試験場で確認しております。しかし、このような手法や遺伝子組み換えなどの新たな技術は、外来魚の生息量が一定水準以下にまで減少した時点で効果が現れること、また、天然水域での利用は、なあ技術的にも難しいなど慎重に行う必要がある関係から、現時点では外来魚駆除を推進し、生息量を減少させることが重要であると考えております。

外来魚の効率的な駆除方法として、遮光カゴ網やビームトロール網による捕獲技術を開発し、駆除現場に導入してまいりました。さらに最近では、外来魚は冬季に温かい水に集まることがわかっておりますので、現在温排水が琵琶湖へ流入する水域を調査フィールドとして、外来魚を集めて駆除する技術の確立に努めています。今後も、現在実施中の駆除事業を着実に取り組んでいくとともに、効率的な駆除事業の開発を進め、在来魚介類の振わう琵琶湖を取り戻して、水産業の振興に努めてまいりたいと考えております。

(答) 琵琶湖環境部長 釣り上げた外来魚の処理としては、大きく分けて3つのパターンがあります。1つは、県の設置した外来魚回収ボックスや回収いけすにより県が回収を行い、昨年度は約35トンの回収を行いました。2つ目として、釣り人が独自に持ち帰り処分。3つ目には、残念ではありますが、釣り人によってリリースされているものも未だにあります。県として引き続きノーリリースにご協力いただけるよう、積極的に働きかけを進めているところであります。

保管施設における外来魚の回収については、「プレジャーボートの利用の適正化の推進に関する協定」を県内のマリーナなどの保管施設48施設と締結しておりますが、環境対策型エンジンへの転換促進策の一環として実施しているものであり、保管施設には外来魚の回収までは義務付けておりません。このためこれら施設の多くは外来魚回収施設などは設置されていません。ただし、保管施設は、釣り人と接する機会が多いことから、リリース禁止に関するパンフレット等によって、釣り人への働きかけを積極的に行なうよう、協力を求めているところでございます。



西村久子事務所

彦根市甲崎町19-1 (稻枝北駐在所より西へ約100m 南側道路沿い)
定例政調会 第1土曜日 午後7時~10時

ご意見をお聞かせください。 Tel 0749-43-2020 Fax 0749-43-4700